

お知らせ 「雲の手通信」の今号は12月歳末号第148号として2頁での発行となります。

1月には新年号第149号を、2月には**第150号記念号**を発行する予定です。

アーカイブス「雲の手通信」 (再掲・昔のコラム)

遊印遊語 老子の「大象無形」 【2006年2月第21号】

中国春秋時代の思想家、老子の言葉です。「大方無隅・大器晩成・大音希声・大象無形」という聯文の一部です。何れも老子独特の反語的な言い回しですが、「大いなる形は無形なり」という意味です。ということで、この印もわざと縁なしで彫って見ました。

老子の唱えた“無為自然”の道を集大成した「道德経」と呼ばれているものの一節ですが、今回この「大象無形」を調べるためにちょっと解説書などに目を通して見ましたら、次のような一文を見つけました。これはまた現代にそのまま通じる素晴らしいしんげん箴言ですね。

原文 「天下多忌諱、民弥貧。民多利器、邦家昏。人多智慧、奇物滋起。法物滋章、而盜賊多有。」
訳文 「禁令が増えれば増えるほど人民は貧しくなり、技術が進めば進むほど社会は乱れて行く。人間の知恵が増せば増すほど不幸な事件は絶えず、法令が整えば整うほど犯罪者が増えてゆく。」

特に付言することはありません。まさにその通り、老子さんはえらいですね。

左顧右盼 第18話 『肥大化する欲望の正体を探る その6』

第10章. 心臓移植の怖いお話

腸について、また大脳について、るる説明をいたしました。その両者の関係が問題になる「臓器移植」について話を進めます。

臓器移植については様々な意見があるところです。焦点の一つは“脳死者”から“生きている”心肺や他の臓器を摘出するところにあります。本来死の最終判定は心臓の停止(つまり脈が無くなる)によるものですが、臓器移植の場合はこれでは遅いので、「心臓はまだ生きて動いているが、脳は死んだから死者とみなす」という新基準を定めて、つまり“生きている臓器を取り出そう”というところにあります。

これによって別の人間の命が救えるから是とする意見と、生きている臓器を取り出すこと自身が違法であり、あるいは倫理的に認めがたい、という意見に分かれるのではないのでしょうか。

しかし、いずれにせよ、臓器移植、特に心肺移植では、移植された心肺が提供者(ドナー)の記憶や情動を一緒に持ってくることの不可思議さが、実は大問題なのです。

さまざまなケースが過去明らかになっていますが、古くは1998年にアメリカで出版された『記憶する心臓』のクレアシルビア(写真右; 当人





の近影)の、新しくは、2011年にフランスで出版された『見知らぬ心臓』の有名女優シャルロット・ヴァランドレイ(写真左)の、それぞれの手記がその生々しい真実を物語っています。

自分の中に見知らぬ“青年”が入り込み、何かを訴え、語りかけてくる驚き、まったく過去の自分とは違う趣味趣向に変わってしまう驚き、などに、まさに“生きている心臓”を移植したからこそその衝撃的な体験なのです。(偶然ですが、二人とも事故で脳死となった青年の心臓を移植されたのでした。)

この二人のケースでは、心臓移植によって自らの命が救われたことを感謝し、新しい心臓に宿るドナーの記憶や情動を受け入れつつ生きてゆこうと前向きに受け止めているところが救いです。

ブログにも同様の不思議なケースが多く掲載されていますが、そのいくつかを引用してみました。

1) 音楽の趣味が変わる 五十二歳の男性の場合。その男性は、以前は静かなクラシック音楽が好きだった。ところが手術後は、ロック音楽を大ボリュームで聞くようになった。さらに娘の友人の十代の若い女性に、心を奪われることが多くなった。実は彼の臓器提供者は、ロック音楽が好きな、十七歳の青年であった。

2) 考え方の変化 人種差別団体KKK(クー・クラックス・クラン)の幹部グランド・ドラゴン(写真右*)が腎臓移植手術を受けた。手術後に考え方が一変して、黒人に同情的になり、全国黒人地位向上協会に加わった。腎臓提供者は黒人だった事が判明する。(*RACISME=人種差別主義)



3) 無念を伝えた奇妙なケース 少女は幼くして命を落とした10歳の少年からその心臓を提供されたが、移植後まもなく、悪夢を見るようになった。彼女が見た夢には見知らぬ男の顔がはっきりと現れ、彼女はその顔を似顔絵として描いたという。そしてその後、恐るべきことが明らかになった。彼女が心臓を譲り受けた少年は、殺人事件の犠牲者だったのだ。そして彼女が描いたその似顔絵や場所の記述が手がかりとなり、少年を殺害した犯人が逮捕された。

と、さまざまな例があるのですが、しかし、ひそかにささやかれているように、需要に応じて臓器を提供する“闇のネットワーク”があり、故無くして無理やり「脳死にさせられた」いわゆる“闇の子供たち”の心臓が患者である子供へ移植されているのであるとしたらいかがでしょうか。手術成功ののち、あるいは成長するにつれて、当人にとって、あるいはご両親にとって、不可解な、また恐るべき問題に直面するかもしれません……。

また、中国政府は長らく真っ向から否定していた、「死刑囚からの臓器移植」が行われていたことを、ようやく認めました。少なくとも数万人の死刑囚たちがその対象となっていたといわれています。またその大半が例の法輪功の信者であるという説も流れています。一時期、中国へは西欧や日本からも多くの移植患者が渡航して大枚のお金を払って移植を受けていたのは事実ですが、もし仮にそうだとしたら、たとえば、アメリカのセレブな奥様が心臓移植を受けたのち、その心臓が彼女にはまったく理解不能な言葉、たとえば、中国語や、ウイグル語で、訴えかけてきたら……、これはまるでホラー映画みたいですね。この話はここで終わりにします。

【臓器移植にかかわるテーマは『雲の手通信』の第14号(2005年6月)から第16号までに、また「闇の子供たち」については第50号(2008年10月)にそれぞれ掲載していますので、ご参照ください。】

(以下次号に続く)